

未来を舵取りできる生徒を育成

考え実現する力を培い

「考え実現する力」で未来を舵取りできる生徒の育成」に取り組む埼玉大学教育学部附属中学校（内田裕子校長、生徒442人）。

その力を育む上で着目したのは判断や選択を行う際に生じる思考の働きだ。これまで培ってきた生徒の「挑戦心」を生かし、チャレンジを一過性の行動で終わらせないようにすることがねらい。さらなる変化の激しい社会を見据え、生徒が自らの未来を切り拓く主体性の向上にもつなげている。その取り組みを上

埼玉大学教育学部附属中学校 ①



グループで交流する生徒たち。多様な解釈が生まれる中、叙述を根拠に自らの考えをより深く発展させた国語科の授業

判断の妥当性、問い直す

挑戦を一過性の行動に終わらせず

「挑戦心を育む『令和の日本型学校教育の実現』」このテーマに関する実践を積み重ねてきた同校。それにより、失敗を恐れずに行動へと移そうとする生徒が増えたという。しかし、課題もあった。挑戦したと

を問い直すことが欠かせない。生徒の実態を振り返ると、受動的な姿勢に加え、必要とされるのは「粘り強さ」。確かな成果を上げて自信を持って語れない姿も見られた。こうした経緯を踏まえて

「速い思考」と「遅い思考」の往還で深める

着目したのが、これまで培ってきた「挑戦心」から生まれた行動を一過性に終わらせないこと。そのためには、生徒自身の価値観や目的に照らし合わせて立ち止まり、考えを深めた上で行動し続ける力の育成が必要になる。その力を「考え実現する力」と捉え、生徒の思考過程に着目したという。

各教科の授業に落とし込む

情報活用過程も意図的に位置付け

判断や選択を行う際に思考の働きが生じるとされてきた。先行研究を踏まえ、具体的に二つの思考があると考えた。一つは直感的に判断しすぐに行動へ移す「速い思考」、もう一つは立ち止まって目的や意味を深く考え行動へとつなげる「遅い思考」だ。こうした「速い思考」と「遅い思考」を往還させた学習活動を展開している同校。その中で生徒が自らの価値観や目的の意味を問い直し、さまざまな情報を吟味し、他者と協働しながら意味付けを更新。そして行動へとつなげていくことは、同校が目指す「未来を舵取りできる生徒」とも重なるためだ。

さらに、各教科等の授業で育みたい生徒像も設定。授業づくりに関わる共通の視点として、①「考え実現する力」を引き出す学習指導の工夫②情報活用能力を意図的に位置付けた授業の工夫を講じたアプローチになる。これまでの学習経験などを振り返り、生徒が自分なりにより良い判断や選択ができるようにしていくことが目的だ。

取り組みの成果 生徒が高く評価

（1月上旬）と年度末（3月下旬）にアンケート調査（5件法）を実施した。多くの生徒が、「考え表現する力」の育成に関して高く評価。教員はそう捉えていなかったため、両者に認識の差が見られた。それと同時に「自由記述アンケート」でも同じ傾向が見られたという。生徒たちから「考えた」「理解できた」という記述が多く見られたが、生徒の自己認識と教員の捉えに差があったためだ。今後、生徒が回答したことの妥当性や学習の実態をどう捉えるかという評価の在り方については、さらなる検討を進めていく方針だ。次回は、こうした同校の研究内容に基づいた一つの実践事例として、国語科が取り組む授業づくりの具体を紹介する。